

六戸町・おいらせ町



1 旧渋沢邸 六戸町

旧渋沢邸は、東京の深川福住町にあった玄米問屋の商家を、明治9年に、近代実業界創世の立役者・渋沢栄一氏が購入し、渋沢家代々の主邸宅として使われていました。明治42年に栄一の息子・篤二氏邸として、さらに昭和4年、孫の敬三氏が洋館を増築させ「和館」と「洋館」からなる歴史的建築物となりました。近代住宅建築史の観点からも、わが国の上層住宅に特有の和洋併置型の構成をよく保った高水準の遺構でもあります。他にも、近代日本の実業界をリードしてきた渋沢家の邸宅として、数多くの会合の舞台となるなど、建築的また歴史的な複合的価値をもった貴重な建築遺構です。



2 氣比神社 おいらせ町

江戸期、おいらせ町の北部には盛岡南部藩最大の藩営牧場である木崎の牧がおかれており、氣比神社は馬をまつる神社として古くから有名です。当時の交通手段であった馬から近年では交通安全の神様とされ、例大祭に開かれる絵馬市は、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財(国選択)に指定されています。



3 一里塚 おいらせ町

おいらせ町にある北浜街道の一里塚です。諸国巡回視察の巡検師の通行の道でもあり、また、氣比神社への参拝道として多くの人に利用されました。



4 今熊保食神社 六戸町

六戸町で最も古い神社といわれ、神社の左後方にある推定樹齢400年の杉は町文化財に指定されています。

5 月窓寺 六戸町

境内に町の有形文化財の指定を受けている学秀作の大日如来像、七菩薩像が安置されています。

【鶴喰鶏舞：町無形文化財】

寛永年間、代官として居を構えた存応が惨殺され、霊



を供養するために月窓寺が建てられ鶏舞が踊られたといわれています。鶏舞は、念仏を唱えながら先祖の精霊を供養する念仏踊りの一種で、五穀豊穡・無病息災・家内安全、集落の繁栄と家内の福を祈る祝いの舞として継承されています。

6 鶴喰若宮八幡宮 六戸町

鶴喰集落南方の高台、鶴喰館先端付近に東方を向いて鎮座しています。参道にはサワラ・桂・銀杏の古木を御神木として注連縄が張られ、この3本の御神木が町文化財に指定されています。

7 海伝寺 六戸町

東北地方で初めて発見された木喰仏があります。木喰仏は、円空仏同様、各地で親しまれ信仰されている。『納経帳』に拠れば、木喰は安永7年(1778年)5月29日に青森県三戸郡の神宮寺(楢引八幡宮)を訪ね、同年6月5日にはむつ市恐山の円通禅寺を訪ねた後、北海道へ渡っており、海傳寺はこの途上に位置している。なお、北海道から本州へ戻った後は西郡方面を通過しているため、渡道以前の像と判断されている。



8 旧苦米地家住宅 六戸町

六戸町において、奥入瀬川流域に現存する家屋のうちでは最も古と思われる。国道45号線沿いの道の駅「ろくのへ」の隣に平成17年3月に移築、一般開放しています。上北地方の民家の建築手法の進展状況から、江戸時代後半には建てられたものと推測されています。苦米地家住宅の特徴の一つとして、「式台」と呼ばれる施設が設けられており、当時は武士階級の住宅に限られた出入口(建物正面左側)であったとされ、身分や家の格式を表現する施設であったとみられます。



9 熊野神社 六戸町

館野公園入り口に鎮座する出雲大社様式の社殿で、境

内には、「橋公塚」と呼ばれている塚があり、祠が置かれている。塚には、50cmほどの卵形の石が安置されていて、橋中納言道忠という公家が都にいる奥方に、石を通して思いをやりとりしたとされる逸話が伝説として残る。

10 六戸町郷土資料館 六戸町

11 聖福寺 おいらせ町 【聖観世音菩薩立像：県重宝】

青森県下所在の彫刻中、最古の作例であるとともに、ひととき優れた作行きを見せる金銅仏。童子のようなプロポーションと華やかな装身具は白鳳時代の小金銅仏の典型を示し、頭上にいただいた宝冠の形状や面貌が666年に制作された大坂野中寺像によく似ている。近畿内で制作され、後年この地に運ばれたものである。

12 阿光坊古墳群 おいらせ町

昭和63年以降の発掘調査の結果108基の古墳、周溝をもたない土坑墓8基を検出し、同種の古墳の中では大規模であり、また残存状況が良好であるとして、平成19年に日国史跡に指定されました。7～9世紀にかけて作られ、千年以上経った今日でも60基以上が観察できる、北東北では大変珍しい遺跡です。刀や勾玉、土師器や須恵器などの出土遺物は、阿光坊づくり古墳館に展示されています。これらの古墳は、前方後円墳を代表とする古墳時代の古墳とは区分され、末期古墳とよばれ、当時この地域で暮らしていたと考えられる蝦夷のリーダーたちの墓と考えられています。



13 阿光坊づくり古墳館 おいらせ町

14 根岸の大いちょう おいらせ町

県指定天然記念物。樹齢1100年以上ともいわれ、幹の周囲16m、高さ32m。慈覚大師がこの地を訪れた際に旅の疲れのために寝込んでしまい、その時身体を預けた、いちちょうの杖が根を生やして、現在の大いちょうになったという伝説が残されています。

